

Title	大学生を語る
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 781-783
Issue Date	1998-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/65771
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

なってしまった。あとで聞けば先生はその頃すでに激痛にみまわれ、大層不機嫌であられた由である。きっと泉井先生のおめでたい席であるということで、病をおして出席され、努めてにこやかにしておられたのであろう。誠に情に篤い方であった。

想い出はつきないが、先生の御人柄の一端を誌し、謹んで先生の御冥福を祈る次第である。

「らいふすてーじ」臨時増刊(新入生歓迎号) 1984年3月15日。

大 学 生 を 語 る

大学時代が一生を規定する

新入生は最初から、それなりに目指すものがあって、大学に入ってきているだろうと思うんですね。ここそこの学部でこれをしたいというところまで明確であるかどうかは別としてね、何かやろうとして入ってきてるには違いないんですね。ただ、やみくもにそればかりしていたのでは将来伸びるとは思われない。いろんなことを経験する、ことに友人との話とかが充分になされないといけないと思いますし、そういった大きな文脈というのかな、そういうものが必要だと思うんですね。

僕の大学時代の友人たちにしろ、その後の生き方みても、やっぱり大学で考えていたことの延長線上に彼らはあるという感じがしますね、そこからあまりはなれていないです。具体的なことは違うわけけれども、何か、大学時代が一生を規定してしまったみたいなどころがありますね。

自分で自分を規定してしまっはいけない

僕自身も、一年工学部に行って、やはりだめだというんで文学部に転部したの

ですけど、もともと文学部に入りたかったんだろうと今から考えると思うんです。

いろいろやってみて、やはり自分が一生やりたいというのはこれではないという気がしてきて、変わるということになったわけです。

その時は、周囲の猛烈な反対がありましてね、文学部なんか行って、メシが食えるか食えないかわからんという、そらまあ当然なんですけれど、しかし僕としては、俺がやりたいのはこれじゃないと思いながら、一生過ごすのはいやだしね、だからそういうところから考えてみると、大学に入った時でも必ずしも自分の適性というのがわかっているとは限らないですね。入ってから触れてみて、そこで、もし、自分のこれが誤っていると気づいたら勇気を出して変わるということも考えた方がいいかもしれませんね。何せ一生の問題だから。ただ変わった結果、食べるようになるかならんかというのはわからんけどね。(笑)

論理的な思考を裏づけるもの

大学にはいったら、とにかく本を読んでほしい。ただ、本を読んでばかりではなくて、いろいろやってみるということがないといけない。その中で本を読むようにしないとね。専門に入ると忙しくなってくるわけだけれど、1・2回生の間にいろいろなことをやったり友達をつくってほしいですね。理論にしても何にしてもそうですが、議論抜きではダメなんです。理論というのは僕の考えるのには、やっぱり感覚とか情緒とかね、そういうものと無縁ではなくて、論理的な思考というものは感覚なり情緒なりという風なもので裏づけされてないと本当に自分のものとはなりにくいと思うんですね。頭の中でかくあるべきだと思っても感覚がついていかないことってあるでしょう、そうすると必ずどこかで挫折してしまうんですね。

理性と感性のバランスを!

感覚でついていけない理論というのは大変危っかしいし、まやかしであるかもしれない。だから勉強に関してもそう言えるんで、学問というのだって感覚とか

より感性的なものが理論的なものの裏づけになっていないと、ちゃんとした理論はでてこないみたいなどころがあると思うんです。そういうものを養うためにも広く読む、文学書も読む、そういう風なふくらみみたいなもの、その基礎は1・2回生時代しかないと思うのですね。本当いえば高校時代にそれをやるべきなんだけれど、それができなかったとすれば、せめて1・2回生の間で大いにやるということがないといかんと思うんですよね。植物でも決まっているでしょ、肥料をやる時が。やっても仕方がない時にやったりすると枯れたりしますからね。人間の育っている時もそうで、肥料をたっぷりやるとそれが全部こやしになって効く時と効かない時がある。大学の前半というのは、効く時だと思うんです。この期にいろんなことを経験し、悩み考えることがあるだろうけど、そういったことを経験していくなかで、人は成長していくと思いますよ。何やったってこやしになる時ってありますしね、失敗を恐れずにやるということが良いと思うんです。ただその時に、充分に考えて、理性的な論理というものと、感性的なものがくいちがわないようにしていかないと、とんでもない方向に走るから、その2つの理性と感性を共に完成させるような努力が一番大切なんじゃないかと思いますね。

京都大学教養部ロシア語担当 山口巖・助教授

「京都大学新聞」 1984年4月16日。

ロシア語の周辺*

文化を担う言葉

言葉というものは、それ自身意志を伝達するために一定の社会集団が生みだし、約束の総体にすぎないが、それは人間の意識と分かち難く結びついているから、人のありよう、あるいは存在そのものを決定することにもなり、民族の文化

*再録『京大サクセスブック'1991 京都大学を知る本』。ただし両方の文章に若干の出入りがある。従ってここに収録したのは出稿原稿である。